

# 4月報(2022年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町 7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

ご復活おめでとうございます。そして「復活の八日間」の始まりです。

受難の主日から始まった「聖週間」を、「天地創造の七日間」を下敷きとして捉え、その後続く「復活の八日間」をさながら一つの大きいなる主日として捉え、典礼的に永遠のいのちを味わうことが伝統的に行われてきました。表現としては昔ながらのものであり、現代的ではないと言われるかも知れませんが、新たな表現やイメージを健全に構成するためにも、その言わんとするところをしっかりと味わってみるのもよいと思います。

創世記では、七日目にすべてを成し遂げて神は安息の日とし聖別したと言われ、旧約時代の安息日とはどのような性格を持つものであるのか意義付けがなされています。もちろん、この記述の背後には安息日の成立に関わる歴史的経緯というものがありますが、それもバビロン捕囚期に仕事を離れて神に向かう日としたことからですから、同じ意義を持つといえます。ともかく、七日目に神がすべてを成し遂げて安息されたことが、十字架上で「成し遂げられた」と息を引き取り、墓に葬られるイエスの姿と重ね合わせられるわけです。そして、イエスに希望をおきしたがって来た弟子や婦人たちにとってみれば、それはさながら天地が過ぎ去ったかに見える出来事であったことでしょう。

次いで七日目を越えて八日目である週の初めの日に、彼らは復活の主と出会います。ラザロに関する箇所、よく知られたマルタのことばに「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」というものがあります。イエスの「あなたの兄弟は復活する」とのことばに答えて発した言葉です。当時、復活自体は広く受け入れられていました。ただ、それは当時の終末思想、「終わりの日」に善人も悪人も生き返って裁かれるというものでしたし、イエスの復活とは似て非なるものです。とはいえイエスの復活に出会った人々にとっては、当時考えられていた世の終わりの日の出来事が眼前に展開しているようなものですから、大きな困惑を伴ったことでしょうし、天地が過ぎ去る時が来たように見えたことでしょう。

そういう意味では「復活の主日」とは、天地創造の七日間を越えて、新しい天と地が到来する八日目の出来事であるわけです。つまり、イエスの復活をもって、天地創造の七日間に由来する万物の終わりの時が到来し、それを越えて続く永遠のいのちが到来します。天地創造の七

日間に造られた世の始まりと終わりを見るならば、それが完成して後に到来する八日目という永遠の始まりです。それは新しい創造の出来事であり、天地創造の時に神の似像として造られたが罪を犯し死に至るようになった人間というものが、イエスの内に復活し永遠のいのちに至り、個々の人はイエスの似姿になるよう招かれるわけです。

こうして、それを典礼的に表現する復活の八日間が始まります。これはさながら復活に始まる永遠のいのちが過ぎ去るものではないように、典礼暦上の復活の主日も過ぎ去らず続いていくのです。わたしたちは終わりの時に、永遠を生きているのです。

また、この復活の八日間は、古代の教会においては新しく洗礼を受けた者が白衣を授与され、それを身に着けて過ごし、次の主日のミサの機会に教会に返したという歴史的な由来もあります。このため昔は次の主日を「白衣の主日」と呼んでいました。これも復活徹夜祭に受けた洗礼は、イエス・キリストの死に与り永遠のいのちに生きることを始める秘跡であることをよく表しています。

ともかく、「ご復活おめでとうございます」とのことばの内に、イエス様のご復活をたたえるだけではなく、「わたしたちはご復活に与っていますよ」・「わたしたちは永遠のいのちに生きていますよ」という意味をしっかりとこめていただければと思います。

さて、新しい年度に入りどのような司牧方針を持っていくか、特に福山と尾道を兼務するようになりましたから、色々考える必要が出てきています。

当たり前ですが、宣教司牧の方針を打ち出すのにただ理念を語るだけではだめです、と言って細々とした行程表を作成したところで、そのために膨大な労力を会議に消費し実行の機会を失うのであれば、何の意味もないでしょう。幸いにして福山教会には人材が豊富ですし、信徒の方の自主的で自律的な活動が望め、主任司祭の暴走を止めることもできます。これを前提として、今後の福山教会のあり方について夢を描きたいと思います…というようなことを2年目に入った昨年度の『萌』に書き、いくつかの主要な点を挙げました。それは：

- ① 貢献度に依らない
- ② レジリエンスとエンパワメント
- ③ 新顔の人々を大切にすること
- ④ 小教区の活動において多様性を大切にすること
- ⑤ 信仰へと導く信徒の諸活動

というものでした。どの程度実行できたか、評価と反省を行わねばなりません、皆様覚えておいででしょうか？多少は進展もあったのではないかとってはいますが、不十分であるとのことばの方が多いことでしょう。主任司祭としては、昨年度打ち出したこれらの方針は今後も継続します。全体的に、新しい人々に対して立場を与えること、新たに福山に来た外国人や長らく住んでいても教会から遠ざかっている人への働きかけ、信徒の自発的活動とカテキスタ養成と小教区での受容などを共に行っていただければと思います。

そして、今後重要になることに多文化共生があります。今までも重視はしてきましたが、反省してみて十分とは言えませんし、時に当事者の方々や小教区内での誤解もあるのが現状です。そこで、司牧方針の一つとして：

⑥ 小教区共同体としての一致

(修道会・小教区内の学校・各地の事業と結びついたコミュニティとの連携)

を加えたいと思います。

具体的には、まず「小教区」というものについての理解を、日本人であろうと外国籍の人であろうと深めてもらいたいと思います。「教会とは建物のことではない」とよく言われます。また宣教司牧とは、単に秘跡を執行し、そのための場である聖堂などの設備を維持することではありません。とはいえ、その地に聖堂が建設されることは、現実には信仰に生き、ミサに集う人々がいることを意味します。シンボルとしての意義もあるわけです。

また小教区とは属地的なものですが、「テリトリズム」ではありません。「縄張り」を主張するものではないのです。しかし、よく「分け隔てなく」とか、「多文化共生」と言われますが、それはどこで実現するのかという場の問題ではあります。わたしたちが「どこの国の人でも、自由に平等に聖堂や施設を使えるようにしよう」という時、それはとても正しく良いことなのですが、もしそれを建物の話としてだけ捉えてしまえば、単なるタイム・シェアリングや設備管理の話に矮小化されてしまうことになります。逆に、地域全体を考えて共に生きることを考えて、初めて共生が成し遂げられます。その「場」として「小教区」をとらえてください。

以上より、小教区というのは、その地に生きる一つの教会の目に見える姿でもあるのです。日本人の教会とベトナム人の教会とフィリピン人の教会とブラジル人の教会とペルー人の教会と韓国人の教会と中国人の教会が別々に存在して一つの聖堂を共有しているというわけではないのです。もしそう考えているなら、それはとても寂しいことです。もちろん、それぞれの言語や文化に従ったミサや信心業や行事は大切です。それでもなお、一つの教会であることは、相互の交わりによってなされます。

わたしたちの教会の用語には「交わり／communio」というものがあるでしょう。まず同じ一つの「キリストのからだ」をいただくこと（聖体拝領）こそ、「communio」です。そうして一つの「キリストのからだ」をいただいて、一つの「キリストのからだ」としての教会を作り上げます。この交わりに分裂があってはいけないのです。

とはいえ、小教区内にいろいろなグループやコミュニティが存在していることは悪いことではありません。地区会であったり、修道会であったり、学校であったり、ベトナム人コミュニティであったり、ブラジル人コミュニティであったり、造船所関係者のコミュニティであったり、そういった多様なコミュニティが形成されることに何の問題もなく、むしろ豊かであるくらいです。

問題になるのは、それぞれのコミュニティが自分たちの独自性や自律を大切にすあまり、閉鎖的になり、他の人々と歩めなくなってしまうことです。典礼や教会学校や多くの面で協力したり交流を持つためには、自主自律だけではなく、相手の文化や言語、行動などを受け入れる必要があります。そしてそれは相互のものであって、いずれか一方の人々だけが受け入れるものではないのです。

ご復活おめでとうございます。

ダン神父



皆さん、復活徹夜祭はカトリック教会が伝統を伝える上で、最も大切で、最も中心的で、最も豊かな美しい典礼です。本日の典礼の中では壮大な神の救いの歴史が展開されます。

復活徹夜祭の典礼は4つの部分から構成されています。第一部は光の祭儀です。最初に復活のろうソクに火が灯されます。これはイエス様が悪と罪、死と闇に打ち勝たれて復活していることを表しています。私たちはそれぞれに手に小さなろうソクを持って、復活のろうソクから火を移してもらいます。これは私たちが復活の信仰をいただき、キリストの光を世に輝かせるということを象徴的に表現しています。

第二部はことばの祭儀です。聖書朗読によってキリストの救いの業を中心に、救いの歴史を記念することばの典礼です。神がこの世の初めから、いつも私たちの救いを望んでおられたことを語る救いの歴史を旧約聖書から朗読します。この朗読が終わると、新約聖書の中から、「主の復活にあずかる洗礼」の意味を述べるローマの信徒への手紙が朗読されます。その後、「キリストは復活された」と述べる福音書が朗読されます。

第三部はキリストの救いにあずからせる洗礼の典礼です。初代教会からこの日に洗礼が行われてきましたが、洗礼の儀で洗礼式が行われます。洗礼を受ける人がいないときには、参加者が改めて洗礼の約束を更新します。洗礼は、生涯更新され続けなければなりません。死から復活へ、新しい命への神秘は生涯かかって歩むべきキリスト者の道です。決定的に復活の世界に入るためには、絶えず古い自分に死んで、新しい自分に生まれ変わらなければならないのです。それは生涯の課題と言えます。ですから、私たちはキリストの霊を受け、霊の導きに従い、生涯成長しますと、復活のろうソクから火を移していただき、約束を更新するのです。これはまさにキリストの復活の証人となることを表しています。

第四部は感謝の典礼です。ここでは、主が死と復活を通して私たちに準備された食卓に招かれます。この祝いを通して、教会共同体はキリストの復活にあずかり、新たにされるのです。

皆さん、今日、私たちは死んで復活された主キリストに向けて、キリストと共に新しい命にあずかるために集まっています。本日の聖書は、命をただ単に生物学的に見るのではなく、神との繋がりの中に見ます。私たちの命は「神によって生かされている命」である、これが聖書の根本的な見方です。

「復活」は、神によって生かされている命がイエス様の中に実現していた、イエス様の命は死を超えて100パーセント神によって生きている命になった、ということを表す信仰です。イエス様は人々から排斥され、弟子たちからは裏切られ、民衆から見捨てられ、十字架にかかって死を遂げていきました。それは、傍から見れば、神にも見捨てられたような姿でした。しかし、イエス様は最後の最後まで神に信頼を持ち続け、出会った人々を愛し抜かれました。そのようにして最後の瞬間まで生きたイエス様の命は、決して死で終わるものではなく、死を超えて神との繋がりを完成させていきました。イエス様が生きている間ずっと持ち続けていた神との繋がりは、死によって裏切られるものではなく、死を超えて完成しました。このことを「復活」という言葉でキリスト教は表現しています。

もう一つの「復活」の面は、イエス様は苦しんでいる人、弱っている人、見捨てられている人に近づき、孤独な人と共にいて、一人ひとりの人間との絆を大切に、その繋がりの中を徹底的に生きられたということです。その繋がりも死によって断ち切られるものではありません。イエス様は、今はもう目には見えませんが、ある意味で目に見えなくなったからこそ、あらゆる時代、あらゆる所にいる人と共にいる方となったのです。それが「復活」のもう一つ意味するところです。

私はベストさんというお爺さんから、とても大切なことを学んだことを分かち合いたいと思います。ベストさんは息子さん夫婦の隣に住んでいて、夕食はいつも息子さんの家族と一緒にでした。でも、息子さんが会社の転勤で3年間アメリカに行くことになりました。ある日、お爺さんの隣人が夕食を一人で食べているベストさんを見て、「一人の食事では、とても寂しいことでしょう」と語りかけました。ベストさんは次のように答えたのでした。「いいえ、寂しいということはありません。私は復活したイエス様と一緒に食事をしているのですから。」私はベストさんの返答を聞いて、なるほど、これがイエス様の復活の意味なのだと深く実感したのでした。イエス様は死者の中から復活したのですから、もはや、時代にも、国にも縛られず、今、ここで、私たちと共に生きているのです。復活したイエス様は、今日、私たち一人ひとりに生きている声で、「恐れるな！私があなたと共にいる」と語りかけているのです。イエス様は、人生の道を私たち一人ひとりの隣で歩み、旅しています。私たちは決して一人ではありません。孤独や苦しみに出会ったときこそ、この大切な真実を思い起こしましょう。

イエス様の神との繋がりは死を超えて完成していきました。イエス様と私たち一人ひとりの繋がりも死を超えて完成され、イエス様と私たちの絆も死を超えて完成しました。私たちはイ

イエス様と神との、そして人々との絆を完成させたことを、今日、祝います。イエス様が入っていかれた命にあずかろうとしています。それは、私たちもまた、イエス様と同じように神との繋がりを生きようとする、人との繋がりを生きようとする、ということだと思います。

私たち一人ひとりの命も、ただ食べて、寝て、必要なものが揃っていて、体が丈夫でというような命のレベルだけではなく、神との繋がりによって生きている命、人との繋がりによって生きている命を生きる。このことを通して、キリストの命にあずかる、これが私たちの信仰です。「死から命へ」の過ぎ越しの神秘の信仰を、今日新たにし、日々、希望と信頼を持って歩んでまいりましょう。

### 【四旬節黙想会】

井本 敏江

「四旬節黙想会」は李相源神父様の「私のノート」という題でした。

償い atonement 私の救い、祈りは私の望みだけを祈るのではない。

祈るのは神、神の望みが自分のものになるように神に仕えるために祈る、共にいる神と、神を愛する、神に仕える、そして神に救われる。

喜びと感謝で変わる人生になる。

福島で幸田司教様から洗礼を受けた小説家の柳美里さんと福山教会の十字架の縁。

回復・リフレッシュ・レスキュー・リカバー

祇園教会の紹介もありました。

久保神父様、元気でダイエット中。豊のある聖堂、上にあるオルガン。

2021年2階建ての信徒会館と司祭館が完成し、教区に立派にして引き渡せること。幼稚園児が270人いること。

何より印象的だったのは、向原教会にいて司祭になった子どもの為に熱心に祈りを捧げていたお母さんがダブって思いだされたことです。この母にしてこの子ありと…。



## 「福島やさい畑」に向けて街頭募金 福祉部



2011年3月11日に合わせて3月6日(日)「福島やさい畑」に向けて福山駅前街頭募金活動をしました。ちょうど「蔓延防止対策」の最終日ということもあって人通りもそう多くはなく、募金活動に関心を寄せる人も多くはなく、募金額も多くありませんでした。それでも私たち教会員5人はわずか1時間とはいえ、3月11日の大震災を忘れないように駅前の皆様に呼びかけました。中には小さな子ども3人連れのご両親がその子どもにお金を持たせ、募金してくれた姿がありました。また、看板を見て街頭募金を見てすぐに財布を広げ募金した人もいました。だから募金活動を終えての帰り道「全くのゼロということはなかったね。」「空振りではなかった！」などと言いながら帰りました。総額7841円、福山の心を添えて「福島やさい畑」に送金しました。

### 南相馬便り

### 地震お見舞いへのお礼

3月16日23時36分に発生した、南相馬市震度6強の地震に際して、沢山の方からお見舞いの電話やメールをいただきました。ありがとうございます。南相馬市の大変な状態が何度も何度も報道されて、心を痛めてくださったようですが、大変な状況の地域は、南相馬市でも北寄りの方で、私たちの住んでいる小高は、南相馬市の一番南寄りです。カリタス南相馬のある原町区はその中間に位置していて、被害は比較的軽くて済みました。修道院は本棚と書類棚から本や書類が飛び出して散乱した程度で済みました。昨年2月13日に起こった地震で本棚とたんすが倒れたので、壁にくぎで止めて転倒防止をしていたので良かったです。昨年は歩けないほどの生涯初めての体験で、びっくりしました。今年はもうちょっと大きく、津波の心配があったので、すぐ近くの高台にある小高神社に避難しました。後日小高神社の鳥居が倒れているのを見てぞっとしました。

### 南相馬便り㊟2022年3月 援助マリア修道会 南相馬修道院 北村令子

コロナの猛威がおさまらず、今年も11年目の3.11を迎えようとしています。また、いろんな行事が中止か縮小を余儀なくされています。追悼祈念式典を10年を区切りに今年から開催しないと決定した自治体もあります。毎年3月10日、同慶寺から海岸通りの被災地域を祈りながら巡礼する「いのちの行進」に、カリタスは私を含め高齢者が多いので部分的に参加し、無理な所は伴奏車に頼って(いのちの行進と心を合わせて)巡礼をしようかと思っています。また3月11日、同慶寺での合同慰霊祭は実施の予定です。これらについては4月号に譲ります。そして3.11の記念については、テレビなどで報道されると思いますので、心を合わせてお祈りください。

11年目になろうとも、3月が近づくと、大地震・津波・原発事故の三重災害を被った方々の中には、情緒不安定になる方がいると聞きます。あの時自分がとった行動は間違っていたのではないかと、多くの人を見殺しにして自分はここに生きている、私は生きてはいけないうのだとか、生きていることが喜ばない。そんな人々の心に神様が生きる喜びと希望を注いでくださるようお祈りください。



広場の奥に新築宿泊施設と入浴施設、右手に研修所（リンクルオークマ） ミニ食堂街（広場の左手）

12月末の地方新聞福島民報に、大熊町の一部が帰宅困難区域の解除がされて、今年の1月ごろから帰宅準備宿泊が行われるとの報道がありました。大熊町は東電の社宅が作業員等のために建てられ、早くから入居し、2019年ごろに町役場が新築再開されています。

役場周辺に建てられた復興住宅90戸には全部住んでおられると聞きました。復興住宅の近くに商業スペースもあり、その区画に準備宿泊のための新しい宿泊施設が建てられ、この1月にオープンしました。6月に解除・帰還が実施される地域は大野駅周辺の様です。

一人の男性が準備宿泊のために自宅を訪れて、避難した時のままの家の中がぐちゃぐちゃになっているのを見て呆然としておられました。片付けてもなかなか片付かず、自宅の中に

泊まるのをあきらめて、庭で車中泊をしておられました。（新築宿泊施設があるのにやはり自宅がいいのか）家の周りや解除された区域は除染されてはいるものの、町の全部が全く安全と言うのもないところに帰還するには相当の覚悟が必要だと感じました。

東京電力福島第一原子力発電所から数キロメートルと言うこの相双地域の富岡町、双葉町でも町の一部の地域が解除され、ここも準備宿泊が計画され、来年の帰還実施に向けて住宅建築インフラ等の整備が進められています。少しずつ住民の帰還を促していますが、10年以上たつて故郷に帰りたい思いはあっても、現実的にお仕事のことなどが解決しなければ、そして子供さんのいる家庭などは学校の問題もありますので、帰りたいから帰りますと、そう簡単にいきません。

5年半前の2016年7月に解除となったここ小高区も、帰還された方の多くは高齢者で、現在3800人位（私たちのような移住者も含めて）です。震災前は13000人位の街だったようです。今は、コロナで人と出会うことがあまりできないので、せめて、こんな者（シスター）と一緒に生活しているんですよ、と言うつもりで、普段歩かないところを歩いて見ました。まだまだいたる所に傾いたままの空き家や草ぼうぼうの空き地が沢山あります。修道院の周辺も



そうです。北側の2軒続いて空き家ですし、東側は大きな庭があったのでしょと想像される空き地が6軒分くらい草ぼうぼうです。(写真)ですから、大熊町、富岡町、双葉町はどこまで住民が帰ってくるのでしょうか？5年半たった小高がまだまだ道半ばであることを見ると、この大熊町や富岡町・双葉町はもっともっと厳しい道のりをたどっていかねばならないと思います。小高区よりもっと原発に近い地域ですから。

この地域の人々の努力に神様が力を注いでくださるようにともお祈りください。復興のための大きな要素である産業についても、汚染水の海洋放出とか、風評被害などの問題を日本全国



民が他人事ではなく、自分のこととして捉えて真剣に考え、生活の中での実際的な支援、心にかけて忘れないという支援と祈りをお願いしたいです。

← 修道院の東側の荒れ地、ずっと左手にも続いています。(こんな荒れ地がいたる所にあります)

でも暗い話ばかりではありません。そんな街に、パン屋がないと、散髪屋がないと、電気屋がないと…と言って他の人のために、いち早く帰還の準備を始めた方も、しかも若い人が、亡くなった親父がやっていた場所で、などと帰還をしようと決意する方々があります。本当に頭が下がります。このような方がいらっしゃる限り、きつときつと町おこしがうまく進んでいくことでしょう。心から応援したいと思います。

小高の農地も少しずつ開墾されて、何になるのか分かりませんが、何とか荒れ地でなくなってくれるようです。少しずつ前に進む希望が見えてきました。



5月ごろの草ぼうぼうの小高の農地



12月整備が始まった同じ農地

今日はここまでといたします。みなさまもお元気で！！

## 事務伊藤より退任のご挨拶

伊藤望

今年3月31日をもって一身上の都合により、教会事務職を退職します。

2018年秋、前任者藤井正晴さんの体調不良により、何とかしなければということで就任しました。就任はしたものの事務職守備範囲は多岐にわたり右往左往の連続でした。その中でも信者の皆様の声掛けや励ましにより続けることが出来ました。足りないところ多々だとは思いますが皆様に感謝申し上げ、福山教会共同体が一人一人と共に歩む教会として更に歩み続けますよう祈念し退任の辞とします。

### 【帰天のお知らせ】

- ・パウロ黒田勝弘(80歳)
- ・ペトロ荒木泰三(85歳)

謹んでお知らせします。どうぞ心を合わせてお祈りください。

## 4・5月の行事予定

4月		5月	
3(日)	四旬節第5主日	1(日)	墓地ミサ(雨天5/8)
10(日)	受難の主日(枝の主日)	3(火)	乙女峠祭り(動画配信)
13(水)	聖香油	7(土)	備後協働体幹事会
14(木)	聖木曜日(主の晩餐)	8(日)	広島地区宣教司牧評議会
15(金)	聖金曜日(主の受難 大斎小斎)	15(日)	信徒総会
16(土)	聖土曜日(復活徹夜祭)	22(日)	尾道マリア祭
17(日)	復活の主日	28(土)	広島地区召命祈りの集い(祇園)
24(日)	初聖体	29(日)	主の被昇天

今月号から月報委員会に中島知子さん、大塚睦雄さん、野田茂生さんがメンバーに加わってくださいました。これからも福山教会協働体の様子を伝えていきたいと思っています。 月報委員会

